

祝もものき事務所3

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 睦月ムンク



祝もものき事務所3

いぬ まき れん しょう

犬槇蓮翔

百之喜の幼なじみ、
格闘家



よし ざる あずさ

芳猿 梓

百之喜の幼なじみ、
舞台役者



おに みつ とも や

鬼光智也

百之喜の幼なじみ、
公務員



にっ た でつ はる

新田哲治

犬槇の後輩



えち ご や ぎん こ
越後屋銀子

百之喜が恐れて
止まない大家

きじ な しゅん すけ
雫名俊介

百之喜の幼なじみ、
弁護士

もも の き た ろう
百之喜太朗

探偵「もどき」、
事務所長

か しょう いん おう か
花翔院鳳華

百之喜の有能秘書



犬槇蓮翔と
『見合いクラッシャー』



都内にしてはかなり敷地の広い家だった。

高い塀に囲まれ、樹木がこんもり茂っているので、外からは家の姿も認められない。

屋根付きの立派な門は大概閉ざされている。

犬槓蓮翔は門の前を通り過ぎて、角を曲がり、

漆喰の塀に小さく設けられている、勝手口のような木戸に向かった。

その際、木戸の前をうろうろしている男がいたが、犬槓が近づくと、さりげなく離れていった。

犬槓はちよつと首を捻ったものの、特に気にせず、そのままに入っただけである。

広い敷地に名前もわからない草と樹木が生い茂り、和風のジャングルのような趣の庭が広がっている。

足下には古びた飛び石の道がつけられ、その先に板張りの道場があった。

道場の中では二人の若い男が稽古中だった。

一人は胴着に袴姿、もう一人は柔道着のように

見えるが、生地が薄い。空手着だ。

一人は細身で痩せ形の、眼差しの鋭い男で、もう一人はがっしりした体軀である。

袴の稽古着なら普通は剣道だ。現に道場の壁には竹刀や長刀が掛かっている。

しかし、二人は素手で仕掛け合っていた。

攻めているのは細身の男のほうだ。がっしりした男を捕まえては何度も板間に叩きつけ、激しい音が響いている。

稽古が一段落するのを待って、犬槓は細身の男に声を掛けた。

「哲ちゃん、久しぶり」

緊迫した雰囲気には不似合いな、のどかな声だが、新田哲治は汗の光る顔で嬉しそうに笑った。

「蓮さん、一手お願いします」

「いいよ。そっちの彼は？」

「後輩です。古猿流を体験してみたいと言うので、師範に許可を取って連れてきました」

「その師範は？」

「静音さんに呼ばれて——すぐに戻ると思っています」

新田と稽古していた若者は眼を輝かせて名乗った。

「沢渡大貴です。あの、BABEL7の——蓮翔さんですよね？」

「あ、知っててくれるんだ。ありがと」

笑って答えながら、犬槿は身支度を調えた。

犬槿蓮翔は総合格闘技の選手で、BABEL7は犬槿の所属する団体の名称だ。

しかし、ここは総合格闘技のジムではない。

古武術の道場だ。

一口に古武術と言っても様々な流派があるのだが、この道場のそれは師範の曾祖父が独自に編み出したもので、『古猿流』と称している。

犬槿は総合の選手になる前からここに通っており、新田とは道場の先輩後輩という関係である。

胴着に袴の新田に対して、犬槿は靴下こそ脱いで裸足になったものの、スポーツジムでよく見られる

タンクトップとショートパンツという姿になった。

古猿流は練習着にはこだわらない。礼法は厳しく守らせるものの、師範の教えはあくまで、

「己の身を確実に守る」

ことにあるからだ。

師範の道元は口癖のようにこう言っている。

「いざ襲われた時、胴着に着替え、防具を纏うまで悠長に待つてくれる暴漢がいるか」

敵に勝つのが目的ではない。確実に退けるのだ。

一種の護身術と言えなくもないが、それにしては、ここで教える武術はかなり本格的だった。

古武術は現代格闘技の常識が通用しないところがおもしろい。身体の使い方もまったく違う。

犬槿が自分より背の高い新田の袖を片手で取り、あつという間に板間に叩きつける。

畳と違ってかなりの衝撃のはずだが、新田は受け身を取って一瞬で立ち上がった。

さらに犬槿が迫る。再度腕を取ったが、その瞬間、

新田は犬槿の足を払い、床に倒すことに成功した。すかさず押さえ込みにかかるうとして咄嗟に飛び離れる。

犬槿が新田の頭を狙って横から肘を叩き込もうとしたからだ。危険な技だが、これも反則にならない。新田にもそれはわかつてゐる。ただ、あまりにも容赦なく頭を狙われたので、苦笑して言った。

「危ないな、蓮さん」

「板の間で寝技はやりたくないからね」

熟練者同士なので、これだけ激しい攻防を繰り返しても、この二人が怪我をすることはまずない。

沢渡が眼を丸くして、その様子を見つめている。

二人とも決定的な一撃を入れられず、一進一退の組打ちを十分ほど続けただけで、あまりの激しさに汗だくになっていた。

「そこまで」

いつの間にか、二人の稽古を見守っていた袴姿の老人が声を掛けた。

師範の芳猿道元である。

七十を過ぎてゐるが、矍鑠たるもので、今でも弟子たちに厳しい稽古をつけている。

古猿流の猿の一字は、芳猿という一風変わった創始者の苗字から来たものらしい。

つまりここは犬槿の幼なじみでもある芳猿梓の実家であり、道元は梓の母方の祖父だ。

犬槿の祖父と道元が旧知の仲で、昔からよくこの家に顔を出していた犬槿は正式に弟子入りしたわけでもないのに、既にかんりの手練れである。

「お邪魔します、師匠」

「孫の代わりにおまえが来たのか？」

「え？」

きょとんと眼を丸くする犬槿はひとまず置いて、道元は新田と沢渡に向き直り、にこにこ笑いながら沢渡に言ったものだ。

「おまえさん、うちで修行するのは少し早いな」

沢渡の表情が不満そうなものになる。

「……失格ですか？」

「いんや、違う。今のおまえさんには空手のほうが似合っているということさ。無理やり型を変えても身につきゃせんだろう。このまま精進すれば優れた空手家になれるものを変な癖をつけることはない。

悪いことは言わん。やめておきなさい」

優しい口調だが、明らかな拒絶を受けて、沢渡はがっかりした顔になった。

「——自信あったんですけど……残念です」

そんな沢渡を新田が諭した。

「大貴。断られたら諦める約束だぞ」

「——はい。わかってます」

無念そうではあったが、沢渡は潔く道元に頭を下げた。

「ありがとうございます」

「いんや。——社会人になっても身体を動かしたいようなら、またおいで」

あくまで優しく言って、沢渡を見送った道元だが、

実のところ、礼儀正しい態度に好感を持ったらしい。

「今の若者の『ちわーす』だの『あざーす』だのはどうにもこうにも身体がむずむずしていかん。第一、何を言っとるか、さっぱりわからん」

と常々嘆いている道元である。

新田も、これからバイトがあると言って、道元に挨拶して稽古を終え、道場を後にした。

土曜の午後である。

犬槿は逆に「茶でも飲んでいけ」と道元に誘われ、家に上がった。

この道場と母屋は短い屋根付きの廊下で繋がっている。母屋は今時珍しい純然たる日本家屋だったが、台所は近代的な設備が整っている。

その台所では和服姿の女性が働いていた。

「こんにちは、おばちゃん」

「あら、蓮くん、いらつしやい」

嬉しそうに声を掛けてきたのは道元の娘で、梓の母親の静音である。肌は白く、丸顔で、眼は細く、

昔ながらの上品なこけしを思わせる風情の人だ。

「うちの子、どうしてる？　生きてるのかしら」

「えっとですね、前に話した時は日雇いのバイトやつてみたいでしたよ」

「元氣ならいいんだけど、あんまり帰って来ないと息子の顔を忘れちゃいそうだわ。——あ、お父さんちよっと出かけてきますから、お茶は自分で淹れてくださいね。——そうそう、戸棚にいただきものの羊羹があるから運くんに出してあげて。——ただし、一人二センチまでね」

容貌とはうらはらに元氣のいい女将さんの静音は、「忙しい、忙しい」と呟きながら出て行つた。

道元は『男子厨房に入らず』が染みついている世代のはずなのだが、この家では男も家事をする。

それなのに重いものを動かすなどの力仕事は、

「男の仕事でしょ」

と女性陣はノータッチなので、長男の梓は以前、「……不公平な気がする」

ぼそりと呟いたことがあるが、面と向かつて母に言ったりはしない。

言つたところで勝ち目がないのはわかつている。

客のはずの犬槇も『勝手知つたる他人の家』で、言われる前から戸棚を開けて盆を用意している。

道元はどこから取り出したのか金属製メジャーを使つて、恐ろしいくらい真剣に目盛りを睨みつつ、羊羹をきっちり二センチずつ計つて切つた。

お客の犬槇が羊羹の皿と湯飲みを載せた盆を持ち、道元は大きな急須を下げて居室に向かつた。

床の間のある立派な和室である。

二人は縁側に腰を下ろした。

「師匠、あつちゃんに何か用だったの？」

子どもの頃からこの家に入出入りしているだけに、

道元と犬槇は師匠と弟子というよりは、祖父と孫の

ような関係である。

「用と言うほどの用ではないが……あまり見ないと、孫の顔を忘れそうになるからな」

そう言いながらも、本題は他にあつたようだ。

「実はな……」

「うん」

「先日、美緒^{みお}が見合いしてな」

「何度目の〜？」

「数えたくもないわ」

実の祖父に苦い口調で言われてしまう美緒は梓の一つ違いの姉で二十八歳。

見合いしても少しもおかしくない年頃であるが、

美緒は『見合いクラッシャー』である。

孫の縁談に対して道元が投げやりなのは、数年前壊れた見合いの数が五十を越えた時点で数えるのが「いやになった」という経緯があるからだ。

美緒の名譽^{めいよ}のために付け加えれば、そのすべてが先方から『どうしても』と持ち込まれた話であつて、美緒が自ら進んで望んだ見合いは一件もない。

そもそも美緒は趣味と実益を兼ねた仕事が忙しく、結婚願望もない。

この状態で相手に会うのは、見合いという制度のルール違反だ。あれは結婚相談所と同じく、真剣に結婚したいと思っている人のための制度なのである。だから美緒本人も静音も話が持ち込まれるたびに丁重に断っているのだが、間に立つ人は諦めない。

「滅多にないお話なんですから」

「先方がどうしてもとおっしゃってしましてねえ。どうか一度お会いするだけでも……」

と拝み倒され、泣きつかれ、最後には根負けして、仕方なく出向く羽目になる。

会えば相手はすっかり乗り気になって、

「ぜひ、このお話を進めていただきたい」

と言うのがお約束だったが、美緒は逆に、

「わたしにはもったいないお話ですので……」

と一度会っただけで、五十回以上に及ぶ見合いのすべてを断ってきたのである。

「ところが、今回は二度目があつた」

「ほんとに〜？」

犬槿は驚き、道元も真顔で頷いた。

「まさにな、青天の霹靂だ」

見合いは二週間前だったが、美緒は先週も今日の相手の男性と会っているという。こうなると、もう普通のおつきあいと言ってもいい。

「美緒姉ちゃん、とうとう結婚するのかな？」

「それが少々わけありでな……」

道元は羊羹を一口囓った。

「美緒とその相手は初対面ではなかったそうだ」

「どういふこと？」

見合いの前日、美緒は女性の友人と外出していた。観劇と食事をして歩いている時、二人の後ろから足早に來た男がいきなり友人を突き飛ばし、彼女のハンドバッグを奪って走って逃げた。

一瞬のことですらもうなかったという。

友人は悲鳴を上げて男を追った。美緒も続いたが、全力で走る若い男に女の足で追いつけるはずもない。そうしたら友人の悲鳴を聞きつけた一人の男性が

人混みの中から犯人に飛びかかった。見事に犯人を捕まえて、ハンドバッグを取り返してくれたという。友人は感激して、お礼をしたいと言ったそうだが、その男性はたいしたことではないからと謙遜して、名前も連絡先も告げずに去ってしまったそうだ。

そして翌日、見合いの席で美緒と再会したのだ。

犬槿は感心して眼を見張った。

「すごいな、ドラマみたいだねー！」

「それなら友人と再会しなければ話が通らんだろう。美緒は見合いの席で被害に遭った友人に連絡を取り、その後は三人で食事したそうだ」

「変わったお見合いだねー」

「まったくだ」

「でもさ、お礼なら一度でいいし、先週と今日は美緒姉ちゃんと二人で出かけてるんでしょ？」

「そうなるな」

友人の姉が結婚しようがしまいが、犬槿には関係ないことだが、道元の態度がいささか気になった。

「師匠はさゝ、その人が気に入らないの？」

「気に入るも入らないも会ったことがない」

「じゃあ、何が引かかってるわけ？」

羊羹をゆっくり平らげ、お茶のお代わりを自分で

淹れて、道元は言った。

「相手の家柄いえがらがな……」

「うん」

「いささか、よすぎる」

「はい？」

お相手は地方では有名な大会社の長男で、将来は父親の後を継いで社長になることが決まっている。

その妻は当然、社長夫人となるわけだ。

普通なら玉の輿たまこしと喜ぶところだが、道元も静音もそういう舞い上がりとは無縁の性格である。

「ああいうお宅なら普通は地元で、家柄の釣り合う名家のお嬢さんを選ぶはず。それなのに、どうしてわざわざ東京で、うちのような庶民の娘を……？」

というのが静音の疑問だという。

道元も同様だ。

「肝心の美緒姉ちゃんは何て言ってるの？」

犬槿の問いに道元は肩をすくめるだけで答えた。

若い娘の気持ちはわからんと言いたいらしい。

犬槿はふと思いついて言った。

「あれ、それじゃあ、さっきの人……」

「何だ」

「ここへ入る時、知らない人がうろうろしててね」

また美緒姉ちゃん狙いなのかと思ったんだけど、

今おつきあいしている人がいるなら違うよねえ」

すると、道元が真顔で意外なことを言った。

「ひょっとしたら道場破りかもしれんぞ」

「ええ？ 今、二十一世紀だよ」

「道場破りは言い過ぎだが、他流試合の申し込みはよくあることだ」

古猿流のような、いわゆる『一子相伝』の道場は日本各地に意外と存在しているらしい。

積極的に門弟を募集したりはせず、看板も掲げて

いないので世間には知られていないだけで。

剣道や空手のような大会はないから、他の道場の人間と手合わせしようと思つたら直接相手を訪ねて試合を申し込むしかない。

「この間もなあ、やたらと日本語の達者な青い眼の外国人が、『頼もー!』と門を叩いてきてなあ」

くすくす笑いながら犬槓は言つた。

「時代劇の見過ぎだよね」

「しかも『忍術を教えてください』と来た」

「ああ。外国の人って、忍者、好きだからね」

古武術の道場なのに看板を出していない、門弟を募集する気配もない、世に隠れている——すなわち忍者だ! と想像をたくましくしたらしい。

道元は丁寧^{ていねい}に古武術と忍術の違いを説明してやり、何とかお引き取りを願つたそうだ。

「そんなふうには見えなかったけどな、なんか、こそこそしててさ、ちよつと怪しかったんだ」

「こんな真つ昼間から、この家に盗みに入る泥棒は

おらんだろう。——入られたところで、家が無駄に広いだけで、取られるようなものは何もないがな」

道元は豪快に笑い、犬槓もつられて苦笑した。

「じゃあ、やつぱり美緒姉ちゃん狙いかな?」

「まあ、美緒もいい歳だからな。行かず後家になる前に落ち着いてくれればそれに越したことはない」

「師匠。今の二十八歳の女の人に行かず後家なんて言うとは後が恐いよ」

「行かず後家が悪ければ大年増だ。昔なら子どもの二、三人いてもおかしくない歳だぞ。相手次第だが、美緒が身を固めれば変な男もいなくなるだろう」

「それでもないと思うよ。今の世の中には『人妻萌え』なんていうのもいるからさ」

「何だ、それは?」

「師匠は知らなくていい話」

道元の相手を切り上げて勝手口を出た時、犬槓の正面から一台の車がやってきて通り過ぎた。

高そうな赤のクーペである。

助手席には美緒が乗っていた。

犬槿は向きを変えて車を追い、正門前に停まった車から降りた美緒にさりげなく声を掛けた。

「美緒姉ちゃん、デート〜？」

「あら、蓮翔くん」

母親の静音が上品なこけしなら、美緒はさながら雛人形ひなのような人だった。それも現代雛ではない。

古典的な雛人形だ。

やや面長の雪のように白い肌、まつすぐな黒髪、切れ長の一重の眼に赤い小さな唇くちびるは、目鼻立ちの整った今時の美人とは一線を画している。

この顔を美しいと思うかどうかは人によって差があるだろうが、一見の価値があるのは確かだった。

加えて、今時『ちよつとした外出』に着物を身につける若い女性は珍しい。

美緒は洋服だとかなり地味に見えてしまうのだが、着物を着ると実に映える。

外見だけではない。美緒は小学生の頃から趣味で

華道や茶道を始め、今では師範の資格を持っている。

箏ことも三味線もやる。書道も達者で料理上手という、

現代日本ではまさに絶滅危惧種きぐしゅに指定されている

『ザ・大和撫子なでしこ』なのだ。

本人の性格もおとなしめながら明るく話しやすく、いつも温順な笑顔で、聞き上手でもある。

こういう人だから見合い相手がいつぺんでのぼせあがってしまうのだ。

運転席から降りてきた男が美緒に尋ねた。

「弟さんですか？」

「いいえ。弟のお友だちで犬槿蓮翔くん。こちら、

木戸剣持きどけんもちさんよ」

「こんにちは」

愛想良く笑いながら、犬槿は相手を観察していた。背が高く、細身ながら筋肉質で、おとなしそうな印象だが、どこか悪っぽくも見える。大いに女性にもてそうなタイプである。歳は犬槿と同じくらいか、

ひよつとしたらもう少し上かもしれない。

「美緒姉ちゃんの彼氏ですか？」

「ぼくはそのつもりでいるんだけどね、美緒さんはどうかな」

余裕を感じる笑顔で木戸はちらつと美緒を見たが、美緒は他のことに気を取られているようだった。

「蓮翔くん、この後、何か予定ある？」

「ううん、今日はもう上がりだけど」

「それなら、荷物持ちをやってくれない？」

子どもの頃からのつきあいなので、美緒は気軽にこういう頼みごとをする。犬櫃も快く引き受けるが、美緒の彼氏を自負する木戸としては目の前でこんなやりとりをされて黙っていられなかったらしい。

「美緒さん、そんなことならぼくが……」

「お気遣いありがとうございます。ですけど、そのお車ではちよつと運べないものですから……」

「車で運べない？ 何です？」

「お箏です」

箏という楽器は結構な大物である。

ワゴンならともかくスタイリッシュなツードアの車内に収めるのは少々厳しい。

「そつかり、土曜だもんね、また結婚式？」

「そうなのよ」

招待客として参列するのではない。

美緒は結婚式の着付けや、演出で使う箏の演奏のバイトをしているのだ。特に演奏のほうは、若くて見栄えのいい美緒は引っぱりだらしい。

木戸はそれでも荷物持ちを務めたい様子だったが、美緒はやんわりと断った。

「このお車を停めておける場所がありませんもの。

蓮くんをお願いします」

木戸は残念そうだったが、気を取り直した。

「わかりました。また連絡します」

美緒は見送りのためにしばらく佇み、走り出した車に向かつて静かに一礼してから、犬櫃に言った。

「お箏を持ってくるから、ちよつと待っててね」

「手伝おうか？」

「うん。家の中は却って危ないの。慣れない人は柱や天井にぶつけるかもしれないから」

美緒は正門横の通用門をくぐって中に入って行き、犬槿は一人で巨大な門の前に残った。

すると、それを待ちかまえていたように、足早に近づいてきた人がいる。犬槿はすぐに気がついたが、さつきうろろしていた怪しい人だ。

見てくれは悪くない。生真面目そうな男性は妙に真剣な、険しい表情で話しかけてきた。

「この家の人ですか？」

「いいえ、違いますけど」

「今、木戸と話しましたよね。今の女性が木戸の結婚相手ですか？」

緊迫感の伴う性急さにさすがに犬槿も眼を丸くし、曖昧に言葉を濁した。

「それはあの一まだ決まっていなと思いますけど」

「やめたほうがいい」

「はい？」

「今の女性に伝えてください。木戸と結婚するのはやめたほうがいい。不幸になるだけです」

「あのおう、失礼ですけど、あなたは？」

「高梨浩紀たかなしひろきと言います。突然こんな話をされても信じられないでしょうが、あれは結婚する資格などない男なんです。調べればすぐにわかります」

早口で言う高梨の表情は真剣そのものだ。

「木戸との結婚は思いとどまるようにと、必ずあの女性に伝えてください。頼みます」

念を押して、高梨はあつという間に立ち去った。

犬槿が呆気に取りられてその場に立ちつくしたのは言うまでもない。

（ええつと？）

突然のことに頭がついてこない。

これはいったいどういうことなのか？

自問していると、美緒が箆袋に入れた箆を抱えて通用門から出てきた。重さはそれほどでもないが、

とにかくさばる楽器である。

箏を受け取った犬槿は、荷物持ちらしく、美緒の後について歩きながら尋ねてみた。

「美緒姉ちゃん、結婚するの？」

美緒はきよんとして振り返った。

「誰と結婚するの？」

「さっきの人だよ」

それでもなお美緒は怪訝^{げん}そうな顔をしているので、犬槿は辛抱強く続ける羽目になった。

「木戸さんだよ。お見合いしたんでしょ」

ここでもやうやく美緒は一重の眼を見張り、はたと手を打ったのである。

「忘れてた」

頭を抱えなくなった犬槿だった。こういうことを大真面目に言うからこの人は厄介^{やっかい}なのである。

「だめねえ。木戸さんは万里^{まり}ちゃんを助けてくれた恩人だから、どうしてもその印象が強いみたい」

「二人きりで会ってて、それはないでしょ」

「ほんとにそうね。会えば楽しくお話できるから、お見合いの相手だつて意識していなかった」

「美緒姉ちゃんらしいけどね」

並んで歩きながら、犬槿は木戸の年齢や勤め先、出身大学まで美緒から聞き出した。

見ず知らずの人間に唐突に言われたことを正直に伝えるような迂闊^{うかつ}な真似は、犬槿はしない。

最後にもう一度、念を入れた。

「それで、結婚するの？」

「しないわ」

あつさり言われて、犬槿は危うく箏を持ったまま転びそうになったが、抜群の反射神経で立ち直った。

「でもさ、俺が見ても、あの人は美緒姉ちゃんと結婚したがつてると思うよ」

美緒は真顔で犬槿をたしなめた。

「それは問題にならないでしょう。どちらか一方がしたがつているだけでは結婚はできないのよ」

真理である。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。